

## P1-028

## 学校現場における性の多様性への意識—公立中学校教員への調査結果より 第2報—

田中 成子<sup>1)</sup>、津田 育久子<sup>2)</sup>、藤田 圭以子<sup>3)</sup>、定政 輝<sup>4)</sup>、森田 富士子<sup>5)</sup>、鬼頭 英明<sup>6)</sup>

たなかや助産院<sup>1)</sup>、  
津田助産院<sup>2)</sup>、  
糸氏クリニック<sup>3)</sup>、  
LGBT 支援団体 Rainbow Create<sup>4)</sup>、  
兵庫大学<sup>5)</sup>、  
法政大学<sup>6)</sup>

**【目的】**「性的マイノリティ」の児童生徒が学校生活を送るためには、教員によるきめ細やかな対応が鍵となる。そこで「性の多様性」に関する学校での現状と課題を明らかにすることを目的に、教員の意識調査を実施した。

**【方法】**2019年8月～12月、助産師が性教育を実施したA市立中学のうち、学校長から協力の承諾が得られた9校において教員を対象に「性の多様性」に関する自記式アンケート調査を行った。

**【結果】**有効回答数:163(調査対象者は学内にて抽出) 1. 大学等の教員養成機関で学んだ経験: 1) 全くない40.5% 2) 憶えていない35.6% 3) 性自認、性的指向のいずれも学んだと回答した割合は12.3%であった。いずれも学んだは、年齢20～30代、教員経験10年以下のみであった。2. 研修会や講習会に参加した経験: 1) ある50.9% 2) ない36.9% 参加経験がない理由として「機会がなかった」が最も多かった。3. 授業等で「性の多様性」を取り上げた経験: 1) ない48.5%。理由として「(教科的に)取り上げる機会がない/カリキュラムがない」「取り上げるほどの知識がない/取り上げた経験がない/自信がない」「授業を担当してない/担当していた頃、現在の環境ではなかった」「性教育は、命の誕生、交際、避妊が中心」「性の多様性まで話を広げる意識がなかった」の複数記述。2) ある41.7%。教科として「保健体育」「社会」「理科」「英語」「音楽」「美術」「道徳」で実施。さらに「性教育」として「養護教諭とコラボ。外部講師の講話(当事者/専門家/助産師)」での実施。テーマは「LGBT(いろいろな性)/性の多様性(性はグラデーション・男女だけではない)/性的マイノリティ」「性自認」「デートDV/(男女)交際/同性愛」「生命/妊娠」「偏見(男らしさ・女らしさ)」「日本の法律・世界の法律」など。4. 「性的マイノリティ」の生徒と関わった経験: 1) ない45.3% 2) ある27.6% 5. 在籍校での配慮・支援事項について(複数回答可:「わからない」「配慮していない」が、他の具体的な項目より多かった。「対象となる生徒もおらず特に配慮はしていない」という記述も複数あった。

**【考察】**「きめ細やかな対応の実施等について」の通知発出後、4年目における実態調査であるが、本調査より、対象となる生徒の有無にかかわらず学校現場での指導方針や性教育に関する計画の中での位置づけについては、必ずしも十分ではなく、課題となっていることが示唆された。

## P1-029

## パチンコ依存症者に対するQOLを高める心理支援の1事例

伊藤 美和<sup>1)</sup>、水内 豊和<sup>2)</sup>

富山大学 大学院人間発達科学研究科<sup>1)</sup>、  
富山大学 人間発達科学部<sup>2)</sup>

**【目的】**自身のパチンコ・パチスロに過度に依存状態であることに悩んでいるA氏を対象に、自己実現、すなわち「なりたいたい自分」を目指した支援を本人のニーズに合わせて行なった心理支援の実践事例を報告する。そして、社会資源などを活用した支援のあり方やその効果を考察することを目的とする。

**【方法】**公認心理師である筆者が、毎週金曜日のA氏の仕事後に、1回90分程度の心理面談を行なった。20XX年1月末から同年11月の約10ヵ月間の期間に、計32回の面談を実施した。そのうち、数回はA氏の体調や様子に応じて金曜日以外にも面談日を設けるなどして対応した。支援内容及び方法については、A氏の思いや健康状態を大切に相談支援となるよう、どのように進めていくかA氏の状態に応じて臨機応変に変えていくことにした。支援内容の方針として、「評価的サポート」や「情動的サポート」、「道具的サポート」、「情緒的サポート」といった厚生労働省が定義するソーシャルサポートの分類に照応した内容となるようにした。また、A氏の心理状態に応じて、認知行動療法などの心理支援も同時に行なうようにした。なお、本研究の実施と公開については、書面と口頭にて説明を行ない同意を得ている。

**【結果】**A氏の月あたりのパチンコ店に行く日数は支援開始4か月後以降から支援終了時まで0回であり、パチンコ店に行かない姿が継続して7か月間みられた。A氏のパチンコ店以外の余暇活動の内容の広がりも増え、WHOQOL26の結果から自身の生活の質や価値が向上したことが伺えた。

**【考察】**パチンコ依存の状態にある者にとって、「パチンコ以外の自分のしたいことをして過ごす」ということは、パチンコに関する問題解決による自信だけではなく、自己肯定感や余暇活動への意欲向上といった心理面においても良い影響を与えており、自己実現のための一手段として支援者との共同による余暇活動における対象者の生活圏内の社会資源の探索と活用を中心とした支援は有効であると考えられる。また、自分一人で問題解決に向けて取り組むのではなく、公認心理師のような専門家に相談し共に解決に取り組むということは、パチンコ依存の状態にある者にとって、自己肯定感や自発的な問題解決に向けての意欲向上といった心理面においても良い影響を与えたと考えられる。